

## 證空にみる教化育成のあり方 — 『述誠』と『述成』の書名問題を中心として—

村上 明也（京都西山短期大学）

善慧房證空（1177-1247）については、法然（1133-1212）門下および浄土宗西山派の祖師という視点から数多くの研究が積み重ねられてきたが、著述の成立年代といった基礎的な問題をはじめ、各著作間における思想の交渉など、いまだ総合的な解明がなされていない。

證空の著作には、善導（613-681）の五部九巻に対する注釈が多く、『観門義（自筆鈔）』、『他筆鈔』、『積学鈔』などはよく知られているところであろう。しかしながら、證空が直接筆を執って撰述したものは極めて少なく、『自筆鈔』といえども證空の講説を弟子が筆録して書冊にしたものである。これは、多くの門弟たちが師の教説を継承しようと尽力した証であり、證空自身も弟子のそうした行為を容認していたことを示す。

もう一つ考えておかねばならないのは、證空が特定の人物に対して自らの領解を開示するという、謂わば一対一の教化育成の場についてである。往復書簡や師弟の問答がそれにあたり、文献としては『女院御書』、「九条入道将軍への返状」などが存在する。

本発表で取り上げる『述誠』（『述成』とも）もまた、題下に「問実信房 答善恵上人」とあるので、ここから證空が実信房蓮生（1172-1259）に対しておこなった教化育成の方法を読み取ることが出来る。しかし、本書にはまずもって解決しておかねばならない問題がある。

従来、本書の書名に関しては、現存最古の文亀2年（1502）写本に『述誠』とあるため、「誠を述べる」と読み下し、證空が「念仏思想の《誠》を蓮生に《述》懐した」書と理解されることが多い。ところが、元禄9年（1696）写本では『述成』との書名が付され、この場合は法雲（467-529）、慧遠（523-592）、智顛（538-597）、吉蔵（549-623）などが経典解釈学に用いる用語として、「弟子（蓮生）の理解に対して仏（證空）がしっかりと祖述する」という意味をもつ。要するに、二名ある書名をどちらで読むかによって、證空の教化育成の方法は異なるのである。本発表では、本書の書名が「述成」として伝写されてきた可能性を提示し、その上で證空の教化育成のあり方を明確化したい。

また、本書にはもう一つ未解決の問題がある。それは、第一答文の末尾（答證空）にある「是れ先師上人の口伝の義なり。聴聞四十余年が間、上人に付き随ひ奉りたるに、四十年の後、此の法門を授けられたり、と正しく書き付けられたり」である。ここは、従来より「先師上人」を法然とみるか、證空とみるか、また各種写本に従って「二十余年」とするか、「四十余年」とするかなど、様々な問題を有する箇所とされる。発表者は、證空（先師上人）と蓮生の関係語る「四十余年」の語に注目して、證空における教化育成のあり方を解き明かしたいと考えている。

したがって、本発表では、『述誠』『述成』の書名問題を再検討するだけにとどまらず、予てより問題視されてきた第一答文の末尾の内容を整理し、證空最晩年の念仏思想が蓮生やその弟子（編纂者？）に引き継がれていく具体相を明らかにする。これによって、證空の教化育成のあり方が、より師弟間のつながりを重視していること、「口伝の義」を通してなされたことに特徴があることを指摘したい。

<キーワード>

證空、蓮生、『述誠』、『述成』、天台教学、四十余年